

CURES Salon

『ヒルファディングと現代資本主義』の出版を振り返って

上 条 勇

去年11月拙著『ヒルファディングと現代資本主義—社会化・組織資本主義・ファシズム』（梓出版社）を出版した。私は、学生時代からヒルファディングについて調べはじめたが、これを含めると本書の作成には17年かかったといえる。ここでは私の自己紹介をかねて、本書成立の経緯を述べておきたい。

北大での教養部生時代に、私は『資本論』の第1巻と第2巻を読んだ。これが研究者への私の歩みのきっかけとなった。学部学生時代には、一方で価値論に関心をもち、わが国における戦前の価値論論争を調べたり、宇野派の降旗節雄先生と論争したり、さらに学生研究誌に拙論を発表したりした。他方で私は、帝国主義論にも関心を示し、帝国主義論史をテーマにかかげた森果先生のゼミに所属することになった。今にして思えば、ゼミの報告のテーマに『金融資本論』（1910年）を選んだのが、私のヒルファディング研究のはじまりであった。卒論のテーマとして、価値論とヒルファディングのどちらを取り上げるか迷った。が、結局後者をとり、「ヒルファディング『組織された資本主義』論の特質」という卒論を書いた。

大学院に進学したときも、私は原論研究者の道を歩むか、ヒルファディング研究をとるか迷った。しばらく二股をかけて、マルクスの『経済学批判要綱』などの抜粋ノートを作る一方で、アムステルダム国際社会史研究所から資料をとりよせ、翻訳ノートを作成した。結局、修論作成時に、私は後者の道を選んだ。というのは、ヒルファディング研究は、理論

志向の私をそれなりに満足させるものであったからである。私は帝国主義論から現代資本主義論に研究をすすめる計画もたてた。現代資本論を書くのがそのころの私の夢であった。

博士時代にも私は、ひとつの迷いにつきあった。私は、マルクス主義から逸脱したといわれる後期ヒルファディングにかんする研究意義を疑い、悩んだ。また、理論研究を離れ、思想史・政治史の領域にのめりこんでいく自分に不安を感じた。このような不安をいだきながら、博士課程3年のとき、私は西ドイツに赴き、ヒルファディング研究で著名なゴットシャルヒ教授と話す機会をえた。（教授のところで大阪市大の星野中氏と偶然出会い、大変お世話になった。）また、アムステルダム国際社会史研究所でヒルファディングの手紙を筆写してきた。この私費留学をとおして私は、迷いが吹っ切れたような気がした。思想史研究にたちいるのも自分のひとつの道であると思いいたったのである。

北大での3年あまりの助手時代、ヒルファディング研究と並行して、オーストロ・マルクス主義の代表的な人物であるオットー・バウアー研究に本格的に着手しはじめた。こうして研究生活が軌道にのりはじめたちょうどそのおり、本学教養部の経済学担当教官の公募があり、1981年9月に私は本学に赴任するにいたった。そして同僚と研究環境に恵まれ、比較的順調にヒルファディング研究を本書の形でまとめることができた。

本書の作成を振り返って、見かけは地味な
（前頁下段へ続く）

権を得ていますが、いわゆる景観権が確立する日がやがてくると考えます。しかし大事なことは法的規制よりも、こういう景観が美しいのだという判断基準を市民が持ち、それを市民が具体的な場所で主張できるようになることです。いいまちに生まれた、いいまちに來たと、多くの人に認められる環境づくりが、いま、大事になってきました。美しい景観は私たちの共有の財産です。

これらを守り育て更に新しく創造しようと昨年発足した景観を守る会の募金は100万の大台を超え、署名も1,000人近くになりました。紙面をお借りして、賛同を頂いた市民の皆様へ心よりお礼を申し上げます。この運動に今後とも格段の御理解と御協力をお願い致します。

(例) 五井建築設計研究所社長
(金沢の美しい景観を守る会代表)

— 地域経済資料室だより —

1月21日(木)午後1時半～3時、当地域経済資料室主催(共催 金沢大学経済学会)により、第3回地域経済研究会を行ないました。(於 本学図書館セミナー室) 新村利夫氏(金沢の美しい景観を守る会代表)に、「都市の景観」と題して、望まれる都市空間とは何か、またその実現のため何をすべきか等をテーマとして、金沢の現状を中心にお話しいただきました。15名の参加者から様々な意見が出され、活発に議論がかわされました。

「関西の資料館を見学して」

昨年11月、関西の資料館を3か所見学させていただいた。最初に訪ねた京都府立総合資料館は京都に関する諸資料が収集されているところであるが、数々の貴重な資料が十分な保存状況のもとに保管されていることに感心した。歴史資料課課長の中谷弼氏、資料主任の川野並子氏から主として資料収集に関して貴重なアドバイスをたくさん頂戴した。次の大阪市立大学都市問題資料センターでは主査の堀江義行氏にお世話になった。ここは国や地方自治体の官庁資料や基礎的データを主として収集しており、都市問題の調査研究において不可欠の資料が系統的に収集されていることに感心した。最後に京都府立労働問題研究所で資料担当の服部園枝氏に官庁資料収集のコツを伺ったのだが、なかなか貰えない資料も、あきらめず何度も寄贈依頼することとかで、お金で買えない資料の収集の大変さを思い知らされた。今回の出張で強く印象に残ったことは、出会った方々が皆「資料マン」(中谷氏はご自分をこう称された。)として誇りをもって仕事していらっしゃることだった。そういう姿勢も含めて、資料の収集・整理・保管に関する多くの有益な知識が得られた。お世話になった皆さんに感謝する。

(地域経済資料室担当助手 松田弘子)

(次頁より続く)

テーマを扱ったが、私はそこに社会の将来を見とおすうえで意外と大きな問題が伏在していることにあらためて気がついた。今後私は、本書でえた手がかりに基づき、歴史の過渡期

における西欧社会民主主義の福祉国家政策の意義を問い直し、すすんでは自分なりの現代資本主義論と未来社会構想の形成をめざしていきたいと考えている。

(金沢大学教養部助教授)